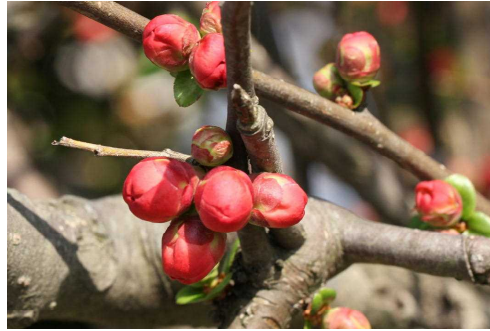


『今月の天候と農作業』

通巻第5623号
1月号
平成30年12月27日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

・向こう1か月の気温はほぼ平年並ですが、期間のはじめは寒気の影響で低いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は低い確率70%です。2週目は平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 12月29日(土)～ 1月4日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 1月5日(土)～ 1月11日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 1月12日(土)～ 1月25日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 種子の選別と消毒

種子は枝梗をよく取り除いた後、塩水選を行い、水で塩水を洗い流します。

種子消毒は、籾袋に余裕を持たせて種子を入れ、薬剤が袋の中心部まで十分に届くようにします。籾に気泡が付いていると効果が低下するため、袋を揺すり気泡をよく抜きます。薬液の水温が10℃以下では効果が劣る場合があるため、各薬剤の水温や使用時間を遵守します。温湯消毒法の場合は、割れ籾の多い種子や一部の品種では発芽率が低下する場合もあるため、事前に確認します。

2 浸種と催芽

浸種の水量は種子籾の2倍以上とし、期間は水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度と十分に行います。水の交換は薬剤効果を安定させるため、3日目以降から行います。種子籾袋の数が多い場合は適宜、位置を入れ替え、温度や酸素が均等になるようにします。浸種が十分になると籾の胚の部分が白く見えるようになります。浸種後は、30℃～32℃で24時間、芽が1mm程度伸びた状態まで催芽します。水切りを行う際は厳寒期であるため、夜間の冷え込みで発芽障害を起こさないように注意します。

◆ムギ類

1 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒と耐干性を高め、分げつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施します。霜や露がある場合や茎の水分が高い時に行うと、茎葉の損傷が大きいため、土壌や株の水分が低い乾燥した時に行います。

分げつ肥は1月中旬に窒素成分で10a当たり2.5kg程度施用し、条播きの場合は土入れします。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

晴天日の午前中はハウス内の温度を十分確保し、光合成を促進させ、午後からも急激に温度を下げないように換気に注意します。夜間、暖房機の設定温度より実際の最低温度が低くなる場合があるので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合は、暖房機の設定温度を普段より高めに設定し、実最低温度を維持します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中の早い時間帯に行い、液肥での追肥は硝酸態窒素主体のものを 사용합니다。

◆きゅうり

1 摘心栽培

草勢が低下すると不良果が発生するため早めに摘果を行います。また、採光・風通しを良くするために、生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所は黄化した葉や病気等の認められる葉を中心に整理します。追肥はかん水時に窒素成分で月5～6 kg／10 a 施用します。

2 つる下ろし栽培

日照不足、低温等の影響による「心止まり」が発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、収穫節位から下5～6枚は葉を残しましょう。

◆ピーマン

促成栽培は、着果量が多いと草勢が低下しやすくなるため、かん水を多く、夜温を普段より高めに設定し、果実の肥大を早めます。また、追肥遅れに注意し、2月までは窒素成分で月3～4 kg／10 a 施用します。

◆トマト

特に光を必要とする作物なので、日中は内張ビニールを開け、光の確保に努めます。果実肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉が必要なため、過度の摘葉は避けましょう。

◆いちご

食味の低下や小玉果化を防止するため、午前中は25～28℃を目安に温度管理を行い、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう摘果します。

追肥は液肥主体とし、窒素成分で月2～3 kg／10 a を施用しますが、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

ハウスやトンネル被覆栽培の播種期や定植期です。支柱立てやビニール被覆等、植付け準備を計画的に進め、地温を確保することでスムーズな発芽や初期生育が期待できます。

◆食用かんしょ

トンネル栽培用の育苗時期です。本播植付けの60日前を目安に種芋を伏せ込みます。夜間は保温資材で被覆し、最低地温が20℃以下にならないようにします。萌芽したら日中の温度は25℃を保ちますが、30℃以上に上昇しないように換気に注意し、丈夫な苗に仕上げます。植付け約10日前から暖かい日中にはできる限り換気を行い、外気に慣らしめます。なお、昨年、かんしょの地際部からの茎の枯れや芋の腐敗などの症状が発生しています。そのような症状のでたほ場の芋は、種芋として使用しません。また、種芋を選ぶ際には手触りをしっかり確認して、わずかでも柔らかいものは避けるようにしましょう。

◆ばれいしょ

下旬より不織布被覆栽培の植付け期です。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗のため、植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には芋の生長点から基部に向けて縦割りし、使用します。縦割りにより芽が順位別に均等に分かれるため本播での生育が揃いやすくなります。

◆ごぼう

9～10月にかけて播種したものが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、マルチ栽培では播種後130日、トンネル栽培では100日程度です。

◆スイートコーン

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬から播種適期です。地温が低いと発芽率が低下するため、地温を高め維持することが重要です。播種1週間前までにはトンネル被覆を行い、地温を確保してください。なお、ハウスやトンネルの大きさ、被覆資材の素材や厚みで温度確保の能力が異なります。温度管理が不適切な場合は、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招くため、生育ステージに応じた保温と換気に十分注意しましょう。また、来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

1月中旬から、完熟きんかんの収穫が始まります。収穫は、着色や糖度を確認後に開始します。

収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15℃を目安に管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいため、果実の過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱しましょう。

◆マンゴー

今年の早期出荷作型では1～2週間生育が早くなっています。花芽の発生状況を確認しながら焦らずじっくりと温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

開花期に湿度が高くと、花穂の軸腐病や灰色カビ病が発生し、その後の果実品質が低下します。早朝換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたらひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。普及センターやJAに相談してください。

また、満開期のホウ素剤の散布、幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止しましょう。

2 落葉果樹

◆基肥の施用

落葉果樹は、柑橘類などの常緑果樹と違い、根の活動が始まるのが2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かき等にまだ基肥を施用していない場合は、早急に行いましょう。

◆くりの剪定

安定多収生産のためには剪定が非常に重要です。弱小枝はすべて除去し、太さ8mm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

1～2月に消灯する作型は、花芽分化時期が1年中で最も低温期になるため、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分に気を配ってください。

なお、電照期間中に低温に遭遇した場合は、消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行ってください。低温開花性系統の場合、消灯後は18時から1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。

また、再電照時期の決定は必ず検鏡してから決定するようにしてください。

低温期はハウス内の湿度も高まりやすいため、白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、各種防除手段を組み合わせ、予防を徹底しましょう。

◆スイートピー

1月は例年天候の変化が小さく、草勢も安定しやすい時期となります。天気予報を確認しながら、品種特性を考慮し、気象条件に合わせた草勢コントロールを行いましょう。

全天日射量は12月下旬から増えていきます。かん水が遅れると2月以降の草勢低下を招くため、天候と草勢を見ながらかん水量を徐々に増やしていきましょう。

窒素肥料を追肥する場合、地温の低下するこの時期は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。また、余分な芽や葉を取り除き、曇天時の落蕾を軽減しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長しますので、十分に採光し、カルシウム剤を施用し、硬さとボリュームを確保して下さい。

◆ホオズキ

早い産地では下旬から植え付けが始まります。土壌消毒を行う際には、事前にビニルフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておきましょう。また、健全な地下茎を使用し、本ぼへの病気等の持ち込みを防ぎましょう。

◆ラナンキュラス

日中は採光のため内ビニルの開閉をしっかり行いましょう。また、日中の管理温度が低すぎると、開花速度が遅くなり収量に影響することから、日中は生育適温での管理を行いましょう。

収穫が続くと草勢が低下しやすくなるため、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

(藤原 明紀)

畜 産

◆家畜防疫対策

豚では、12月25日現在で、岐阜県において、豚コレラの発生が6例続発し、野生イノシシにおいても、79例の豚コレラ陽性事例が確認されています。また、中国では、これまでにアフリカ豚コレラが68件発生しており、国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から、農場を守るため、豚舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。鶏では、鳥インフルエンザの発生リスクが高い時期が続きますので、野鳥がウイルスを持っているという意識を持って、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は年間で最も寒く、乾燥する時期であると同時に、舎内温度を維持するために、畜舎を閉め切ることから、舎内が換気不足になる時期でもあります。気温が上がる昼間は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど換気を十分に行いましょう。また、乾燥すると埃や塵が呼吸器病の原因となることから、湿度を適度に保つために細霧の噴霧などで、舎内が乾燥しすぎないようにしましょう。

哺乳子牛などの幼畜においては、隙間風や床の湿りは肺炎など病気の原因になるため、保温箱やコンパネによる風よけの設置とともに、コルツヒーターや赤外線ヒーターなどの効果の高い保温器具を使用しましょう。また、子牛の寝床は、常にきれいで乾燥した状態にし、コンクリートが露出しないようオガクズなどを厚めに敷き、子牛のお腹が冷えるのを防ぎましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では防風ネットの設置等による対策を行います。また、山間地で積雪による枝折れや裂傷が発生した際は融雪を待って事後対策を行います。

2 定植ほ場の植付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植後摘採するまで4～5年かかり、一度植付けると植替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の微気象や茶樹特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は排水が良く、耕土の深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠・暗渠等の対策を行います。

また、アルカリ性土壌や改植茶園では土壌pHの調整や堆肥施用による地力増強を図ります。更に、土壌線虫被害が懸念されるほ場では、早めの土壌消毒を心掛けましょう。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌作業は玉切り後できるだけ早めに行い、植菌後の原木は、菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から60cm以下の高さに横積みして笠木や遮光ネット等で被覆し、保温と保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持や、袋かけ又はビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の一週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

31年作は、基本耕作技術を適期に・確実に実行し、気象に左右されにくい『根張りの良い葉たばこ』づくりを目指し、収量・品質の安定確保に向けて取り組んでいきましょう。

早作で根張りのよい充実した作柄をつくるために以下の作業を行いましょう。

- 1 前作物等の関係で、準備が遅れないように計画的な本畑準備作業を行いましょう。
- 2 施肥設計は、土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。
- 3 堆肥は、良質完熟堆肥を、すじまき散布しましょう。

大柄晩作化、グレー葉生出防止の為に未熟堆肥投入は、避けましょう

- 4 施肥畦立は、ねり畦防止の為、土壌水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた

塊を指で押した時2～3個に割れる状態)を目安に、移植1ヶ月前までに完了しましょう。また、併せて水田、畑を問わず、ほ地周囲、枕地に排水溝を完備しましょう。

5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に則って実施しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
施設果菜類	病害全般	—	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病※※ うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	多 並 やや少 並 並	平年に比べ、べと病の発生が多く見られます。多発後は防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 既に発生が多いハウスでは、1週間間隔で複数回の連続防除を徹底します。また、薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。 罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年より多い 少	感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	少 並 並 やや少	いずれの病害也多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ ※※	やや少 多	ヒラズハナアザミウマの発生が多くみられます。主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。
冬春トマト	葉かび病 ※ 灰色かび病※ うどんこ病 すすかび病※	並 並 並 やや多	うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので過繁茂にならないように管理し、ハウス内の換気を良くします。 また、曇雨天日の昼間に加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	カベコナジラミ類	少	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや少 並	多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。
	ハダニ類 アブラムシ類	やや少 やや少	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので低密度時に防除を徹底します。 また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されていますので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
1) ※は防除情報、※※は注意報を発表しています。3) のホームページに掲載しています。 2) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			



(病害虫防除・肥料検査センター)